

# O・ヘンリー文学の特質に関する一考察

## On the Peculiar Characteristics of O. Henry's Works

齊藤 昇

SAITO Noboru

O・ヘンリー文学への評価が下降に転じたのは1950年代で、中でも1951年刊行の*The Literature of the American People*の中でGeorge F. Whicherが“The world of O. Henry is an intellectual Sahara”と称したのが先鞭をつける形となった。次いで1953年に出版されたR. E. Spiller編集の*Literary History of the United States*では、改定に当たってO・ヘンリーの項を削除するという徹底ぶりだった。このような傾向に対する反動であろうか、アメリカ文学史上でO・ヘンリーの定着すべき位置を再検討するかのよう、1960～70年代の間に、以前よりも増して彼に関する多くの学術論文が発表されている。その後の状況も同様で、1980年代には*Dictionary of American Literary Biography*や*Fifty Southern Writers After* (1900) の中では、O・ヘンリーにまつわる最新の情報も盛り込まれたり、1990年代に入ってもDavid Stuartの著書*O. Henry: A Biography of William Sydney Porter* (1990) を始めとして、O・ヘンリーに関する研究書の刊行は断続的に行われている。冒頭より述べてきた通り、O・ヘンリーの作品に対する評価には、時代によって激しい変動が見られる。しかし、文学批評界における前述のような作家の名声の浮沈にかかわらず、彼の著作が一貫して広い読者層に愛好され続けてきたことは疑いをいれない。

アメリカ国内におけるO・ヘンリーの著書の発行部数は、彼の死後10年間で五百万部を超えたとされる。イギリスではHugh Seymour Walpole卿が彼を“the father of this new American Literature”と評したことも手伝って、多くの読者から大いに歓迎された。さらに英語圏のみならず、フランス、ドイツ、ロシア、スペイン、スウェーデン、ノルウェーそして日本などでも、それぞれの言語に翻訳されO・ヘンリー文学の愛読者は短期間で全世界に広がったのである。特にロシアでは、ChekhovやMaupassantにも匹敵するアメリカ作家として高く評価され、翻訳書の発行部数は1920年代の数年間で百万を突破したほどであった。その人気の高さでは、続いてロシアの読者層に紹介されたJohn Steinbeck, Erskin Caldwell, Ernest Hemingwayなど、他のアメリカの作家の追随をまったく許さなかったほどである。

日本では、O・ヘンリーの歿後十年に当たる1920年（大正9年）に、新しい成年読者層を狙って創刊されたばかりの雑誌『新青年』に「運命の道」(“Roads of Destiny”)が掲載されたのが最初の紹介であった。現在でも主要な作品が数種の文庫本などを通じて容易に入手できること、また“After Twenty Years”や“The Last Leaf”などが、しばしば英語の教科書に採用されていることから、その人気に衰えがないのは明らかであろう。しかし、

出版物の内容が代表的な作品に集中しているため重複するものが多く、未刊のものを含めると500編に近いO・ヘンリーの全作品中で実際に日本の読者に紹介されているのはその一割程度の短編小説にすぎない。

いずれにせよO・ヘンリーの作品が、時には文学評論家たちの苛酷な批評にさらされながらも、アメリカはもとより世界の多くの国々の読書層において、長年に亘って愛読されて来たことには、何らかの理由があるに相違ない。本稿においては、諸作品に見られるO・ヘンリー文学の特質、たとえばユーモア、ウィットそしてペイソスといった要素が織り成す文学的コラボレーションという形態を代表的な短編小説をいくつか取り上げて考察したい。

## 1. プロットの巧みさ

“Tommy's Burglar”は、1905年5月14日発行の*The New York World*紙の日曜版に掲載された。これは、留守を狙って侵入した泥棒が、物怖じしないその家の少年に発見されて、何も取らずに裏口から退散するまでの物語である。少年との問答に、出版業界の編集者の気難しさを絡ませたり、改心談を持ち出したりする不自然さが目立つため、同じ年に発表された“The Last Leaf”や“The Gift of the Magi”などに比すると構成の点では凡作の感を禁じ得ない。だが、この作品で興味を引くのは、「短編作家」としてのO・ヘンリーによる短編の目安を知る記述が見られる点である。

たとえば、泥棒が忍び込むまでの冒頭の叙述を70語ほどに止めて、その理由を彼は“The burglar got into the house without much difficulty; because we must have action and not too much description in a 2,000-word story” (*Collected Stories of O. Henry*, 647)と述べている。さらに、少年Tommyとのやり取りの後で、家を出て行く段になると、“...and now hurry and let me out, kid. Our 2,000 words must be nearly up” (*Collected Stories of O. Henry*, 650)と、繰り返して2千語へのこだわりを見せている。事実、O・ヘンリーの作品の大多数は2千語前後の短編で、長いものでも3千語をいくらか超える程度のものが、若干散見されるに止まっている。

この2千語の枠組みの中で、O・ヘンリーは独自の着想によるプロットを巧みに展開した。彼はたとえ短編であっても、発端、読ませ所のヤマ場、事態の転換と意外性のある結末など、起承転結の構成による物語の自然な進展に読者を引き込み、微妙な人間心理や人情の機微を描いて読者の心をつらえたのである。1923年に発刊された*The Development of the American Short Story*の著者F. L. Patteeは、その時期まで人気が高揚していたO・ヘンリー文学について、“He is exclusively an entertainer”と述べて、評価の上向きの先鞭を取ったアメリカ文学の研究者である。一方、PatteeはO・ヘンリーがいかに読者の心をつらむ術を心得ていたかに関して、同書の中で次のように述べている。“He knew precisely how much of the sugar of sentimentality the great average reading public must have, and how much of the pepper of sensation and the salad-dressing of romance” (*O. Henry: The Legendary Life of William S. Porter*, 236)。これは確かに、O・ヘンリーの文学作法の一面を言い得たものであろう。しかし、それと同時に、これらの砂糖や胡椒やドレッシングが、O・ヘンリーの暖かい人間性によって調理された素材の味つけとして加えられた点も看過することはできない。これなくしては、彼がいかに大衆の好みに迎合する手法に長けてい

たとしても、その作品が現在まで脈々と読み継がれて来ることは不可能であったからである。呼称の適不適はさておき、O・ヘンリーが読者の心に感動を与える「エンタテイナー」であったことに疑いの余地はない。時に現実との差異を感じつつも、大抵の読者は作中人物の喜びや悲しみに共感して、時には笑いほほえみ、また時には涙するのである。すなわち、O・ヘンリー自身が“The Gift of the Magi”で述べている通り、“Life is made up of sobs, sniffles, and smiles, with sniffles predominating”という格言を、読者はまさに実感することになる。かくして、O・ヘンリー文学の特質として常に指摘されるのが、ユーモア、ウィットそしてペイソスの三要素である。

## 2. O・ヘンリー文学のユーモア

“The Ransom of Red Chief”は、1907年7月6日の*The Saturday Evening Post*紙に発表された作品である。これは南部のいわゆる「トール・テイル」の範疇に入るものであるが、その軽妙な語り口と抱腹絶倒な内容は、ともに最もユーモラスなO・ヘンリー作品の一つと呼ぶにふさわしい。この話の語り手Samと相棒のBillは、事業資金の不足分2千ドルを稼ぐために南部アラバマの小さな町サミットで、土地の資産家の一人息子を誘拐する。ところが10歳のこの男の子が手に負えない腕白で、散々痛みつけられた彼ら二人の方が音を上げて逃げ出す始末である。この話は次の書き出しで始まる。

It looked like a good thing; but wait till I tell you. We were down in South, in Alabama — Bill Driscoll and myself — when this kidnaping idea struck us. It was, as Bill afterward express it, “during a moment of temporary mental apparition”; but we didn't find that out till later. (*The Complete Writings of O. Henry*, Vol.X,103)

暴れ回る子供を馬車に押し込んで、何とか隠れ家の洞窟まで連れて来るが、それからが大騒ぎである。学校は大嫌いで、家には帰りたくないというこの人質は、たちまちインディアンの“Red Chief”と自称して、誘拐した側の二人をキリキリ舞いさせる。Samが見張りの外回りから戻ると、Billは顔じゅうの引っ掻き傷や打ち傷に絆創膏を張っている有様である。ついには、ズボンをまくり上げて、向こう脛の打ち傷を調べながらBillが言い放った。

“We're playing Indian. We're making Buffalo Bill's show look like magic-lantern views of Palestine in the town hall. I'm Old Hank, the Trapper, Red Chief's captive, and I'm to be scalped at daybreak. By Geronomo! That kid can kick hard.” (*The Complete Writings of O. Henry*, Vol.X,105)。Samの方も、白人のスパイ“snake-eye”と名付けられ、拳銃の果てには、この大平原で泣く子も黙る赤い酋長の陣地へ挨拶もせずに入った罪で、日の出とともに火炙りにすると宣告される。夜明けにSamは叫び声を聞く。何事かと思い飛び起きた。例の赤い酋長がBillの胸に馬乗りになっていたのである。片手にBillの髪の毛を巻き付け、もう一方の手にはベーコン用の鋭いナイフを握っていた。前夜の判決に従って、本気でBillの頭の皮を剥こうとしていたのだ。それ以後、Billの脅え方は尋常一様ではない。身代金の交渉に出かけようとするSamに哀願する件は、思わず哄笑を誘う。「なあ、サム」とBillは言って、次のように言葉を続けた。“I've stood by you without batting an eye in earthquakes, fire and flood—in poker games, dynamite outrages, police raids, train

robberies and cyclones. I never lost my never yet till we kidnapped that two-legged skyrocket of a kid. He's got me going. You won't leave me long with him, will you, Sam?" (*The Complete Writings of O. Henry*, Vol.X,111)といった調子で泣き言になる。もっともSam自身も、朝日が昇ったら火炙りにされるのではないかと内心びくびくしているが。ともかく、身代金を要求することになるが、一刻も早くこの酋長から逃れたいBillの提案で、相手が応じ易いようにと額を2千から1千5百ドルに下げて、父親に手紙を送りつける。手紙の結びには“Two Desperate Men”と一応凄んでみせるものの、親のほうが一枚うわてだった。二人の小心な悪党が息子に手こずっている事はお見通しで、身代金の代わりに次の返事が届けられる。“I think you are a little high in your demands, and I hereby make you a counter proposition, which I am inclined to believe you will accept.” (*The Complete Writings of O. Henry*, Vol.X,117) 結局二人はこの提案に従う他なく、身代金をせしめるどころか逆に250ドルを巻き上げられたあげく、やっと厄介払いをしたこの男の子が、追いかけて来ないかと恐れながらサミットの町を離れるのである。

“The Ransom of Red Chief”がユーモラスな作品として成功した最大の理由は、本来は遊びが入り込む余地のない真面目でせっぱつまった主題を、わざと喜劇的に描いて笑いを誘うという諷刺的效果を狙った点であろう。また、これはO・ヘンリーが得意として好んで用いた手法で“A Retrieved Reformation”など、同様な筆法による作品は少なくない。さらに、この作品が当時のアメリカの読者層に歓迎されたもう一つの理由は、二人の誘拐犯の巧妙な性格付けである。いわゆる、強がりを行いながらも、どこかお人好しで愛嬌のある悪党たちは、およそアメリカ大衆お気に入りの人物像と言える。ではここで、「アメリカン・ユーモア」とO・ヘンリー作品におけるユーモアについて一考してみたい。

元来、何をユーモラスと感じるかは、国民性や時代によってかなり相違するものと思われる。同時に、文学、演劇、音楽、絵画その他さまざまな分野で、各国民が創造するユーモアもまた、それぞれの特色を持つことは当然である。Shakespeare戯曲の凝りに凝った台詞を、アメリカの劇作家が書くことは、その歴史・文化の背景からして困難であろうが、アメリカはまたアメリカでこの国らしい独自のユーモアを持っているのである。確かにアメリカの文芸には、騒々しく中身の乏しいジョークも多いが、この国のユーモアの本流はイギリスから伝承したもので、それにアメリカ人独自の感性で磨きをかけ、特にユーモラスな語り口では本家をしのぐとさえ感じさせるものもある。文学を例にとれば、真っ先にMark Twainの名を上げなければならない。奇しくもO・ヘンリーと歿年(1910年)を共にするこの作家の代表作*The Adventures of Tom Sawyer*や*The Adventures of Huckleberry Finn*をはじめ多くの作品に見られるユーモラスな表現には、他の追従を許さない絶妙な味わいがある。そこには、しばしば「知性をくすぐる羽根」と評されるヨーロッパ的ユーモアとは異質であるが、かといってドタバタのジョークでもなく、それなりに極めて洗練されたアメリカン・ユーモアがそこはかとなく感じられるのである。もちろんO・ヘンリー作品も既述したように、同種の系譜のアメリカン・ユーモアをその特質としていることに疑問の余地はない。

年譜を重ね合わせると、Mark Twainの生年は1835年で、O・ヘンリーより27歳年長であるから、文壇に登場した時期にも当然大きな隔りがある。たとえば、代表作*The Adventures of Tom Sawyer*はO・ヘンリーが“Will”と呼ばれていた時代、すなわち叔母

Evalinaの私塾での勉学を終えた頃に、また続く*The Adventures of Huckleberry Finn*はテキサスの牧場生活を離れてオースティンに移住した頃に、それぞれ発表されている。従って、O・ヘンリーがこれらの作品に接したのは彼が記者あるいは作家としての活動を始めた後になる。次いで1905年7月*Munsey's Magazine*誌に掲載されたO・ヘンリーの作品“Hostages to Momus”は、彼がMark Twain文学の強い影響を受けたことを示す一例として上げてもよいだろう。

モモスは、ギリシャ神話の「あざけ嘲りの神」である。鉄道会社の社長を誘拐してきたドジな二人組が、多額の身代金を取るために持ち金250ドルを使って贅沢な食事をとらせ、できる限り優遇する。しかし、実際には会社は既に廃業しており、人質のために部下たちが手を尽くして掻き集めた金は、総額137ドル50セント。こんなことで誘拐犯にされてはたまらないと、二人は今までの事はちょっと思いついたささやかなお遊びに過ぎず、「誘拐ごっこ」はこれで終わりだと誤魔化すのである。“A Retrieved Reformation”の前座とも同工異曲とも言えそうなこの作品は、Mark Twainの*The Adventures of Tom Sawyer*から得たアイデアによるものと指摘されているが、一方においては、これはO・ヘンリーが服役中に囚人たちから聞いた話を脚色したものであるという説も根強く残っている。諸説の真偽は別として、“Hostages to Momus”を執筆したO・ヘンリーがMark Twainと同様に、純粹にアメリカの風土から生まれた粗野で明るく健康な民衆の社会生活を新大陸の文学に特有のユーモラスな筆致で描いたことは、紛れもない事実である。さらに、アメリカン・ユーモアと並んで、文学の楽しい飾りとも言うべきウィットに関しても、アメリカ独自の笑いと諷刺に富んだ作品の登場が予想されたのは当然である。

### 3. O・ヘンリー文学のウィット

機智とか頓智などと邦訳されるウィットの効用は、軽妙な会話や洒落た言いまわしによって生み出される笑いである。O・ヘンリー文学については、時に不必要な誇張や、くどすぎる駄洒落、きざな気取りなどが混じっているという不満が指摘され、同時にそれは、あながち的外れの批判とばかりは言い難い。事実、先に引用した“Tommy's Burglar”に関しては、多少なりともその感がない訳ではないことは既述の通りである。しかし、それは一般にO・ヘンリー作品がウィットに富んだものであるという高い評価を否定するものではない。それどころか、彼の作品には優れたウィットの味つけが行われて当然と考えられる根拠がある。それは、明らかに少年期における多読による影響である。

いくつかの伝記を渉猟すればO・ヘンリーの教育は主として前出の叔母Evalinaの指導によるものであった。Evalinaが英文学に精通していたので、彼は叔母の私塾でShakespeareやDickensなどの多くの作品を読んだと言われている。従って自ずとShakespeareの戯曲に溢れることで諷刺や洒落、Dickens文学の独特なユーモアやウィットに、彼が深い感銘を受けたことは想像に難くない。ウィットに富むO・ヘンリー作品としては、彼の短編中でも典型的な小品に属する“The Confession of —”などが、その代表的なものになるだろう。物語の語り手X嬢は、ロンドンの近郊にある上流家庭の子女を対象にした寄宿学校で、6年前学んだ後にアメリカに戻ったばかりの娘である。この作品には、「私」の終始軽妙な語り口に味わいがあると共に内容的にも、ひと捻りした面白さが感じられて、隠された巧まざるウィットや読者の心を無意識のうちにくすぐる効果が遺憾なく発揮されている。その

意味でも、これはO・ヘンリー文学の真骨頂を示す作品のひとつと言うべきであろう。

#### 4. O・ヘンリー文学のペイソス

ユーモアやウィットと並んで、O・ヘンリー文学の顕著な特質として上げられるのが、ペイソスである。文学、音楽、絵画などの表現で哀れみを催させる性質、時には哀感と訳されるこの特性は、極めて多くのO・ヘンリー作品の大きな魅力として読者の心を惹きつけている要因である。たとえば、“The Last Leaf”はO・ヘンリーの全作品中でも、とりわけ読者に愛読されている一編である。1905年10月15日の*The New York World*紙の日曜版に掲載されたこの作品には、次のような副題が添えられている。“The pathetic story of two girls artists in old New York and a gray-haired failure who made successful sacrifice at the end”

ニューヨークでも一風変わった古めかしいグリニッチ・ヴィレッジ地区に、絵描きたちがうろうろ集まって来てつくったコロニー、いわゆる「芸術家村」がある。これは、そのコロニーの住人であるJohnsyとSueという若い女流画家、そして彼女らの階下に住むドイツ系の画家、Behrman老人が織り成す物語である。Johnsyはカリフォルニア州、Sueはメイン州の出で、雑誌の挿絵などから得る収入で生活しながら一人前の画家になることを目指している。一方、Behrmanは40年間絵筆を握って口癖のように傑作を描くと言いながら、未だに着手さえしないあり様で、僅かな収入でジンを手に入れては、いつも飲んだくれている芸術の落伍者であるという設定だ。ところで、ニューヨーク一帯を荒らして多くの犠牲者を出した肺炎と呼ばれる「目に見えない冷酷な侵入者」に襲われて、Johnsyは重篤の床に臥している。医者とSueが最も心を痛めているのは、次第にJohnsyが生きる意欲を失っていくことであった。彼女のベッドから見えるのは、窓もなく煉瓦一面の隣家の壁の中程まで這い上がっている蔓についたツタの葉。その蔓に残っている僅かな枯葉の「最後の一枚」が散るとき、Johnsyは自分も死ぬものと心に決めている。11月の風雨は、蔓にしがみついている葉を容赦なく吹き飛ばし、もはや残るは数枚となった。Sueは、雑誌の挿絵用のペン画を描いている。彼女はそれで得た金でJohnsyに栄養を摂らせたいのだが、病状を苦にして相手は悲観的になるばかりである。

“Try to take some broth now, and let Sudie go back to her drawing, so she can sell the editor man with it, and buy port wine for her sick child, and pork chops for her greedy self.” “You needn't get any more wine,” said Johnsy, keeping her eyes fixed out the window. “There goes another. No, I don't want any broth. That leaves just four. I want to see the last one fall before it gets dark. Then I'll go, too.” (*The Complete Writings of O. Henry*, Vol. III, 188-189)

Sueは、挿絵のために老いた世捨人の鋤夫のモデルになってもらったBehrmanに、Johnsyの病状をありのままに話す。Behrmanは赤くなった目にはっきりと涙を浮かべて、Johnsyの馬鹿げた空想に対する軽蔑と嘲笑の言葉をドイツ語訛で次のようにわめき散らした。

“Vass! he cried. Is dere people in de world mit der foolishness to die because leafs dey drop off from a confounded vine?... Vy do you allow dot silly pusiness to come in der

prain of her? Ach, dot poor leetle Miss Yohnsy. ”

さて、風雨の一夜が明けた翌朝、Johnsyが求めるので、Sueはしぶしぶ窓のブラインドを上げた。叩きつけるような雨と激しい風が長い夜じゅう荒れ狂ったというのに、煉瓦の壁の上にはツタの葉が一枚、まだはっきりと残っていたのである。それは蔓に残っている最後の一葉だった。葉のつけ根の近くはまだ濃い緑色だが、鋸の歯のような縁は黄色く朽ち果てている葉が一枚、地上から20フィートほどの枝に健気に残っていた。さらにもう一度風雨の夜が過ぎても、敢然として散らない葉をじっと見つめていたJohnsyの心に、ようやく生きる気力が湧いて来る。

“I've been a bad girl, Sudie,” said Johnsy. “Something has made that last leaf stay there to show me how wicked I was. It is a sin to want to die. You may bring me a little broth now, and some milk with a little port in it, and —no; bring me a hand —mirror first, and then pack some pillow s about me, and I will sit up and watch you cook.” (*The Complete Writings of O.Henry*, Vol.Ⅲ,193)

こうして、Johnsyは生命の危機を脱した。しかし、そのためには芸術の落伍者の最後の犠牲が必要だったのである。その日の午後ベッドに身を起こして、編み物をするまで回復した彼女にSueはBehrman老人の悲劇的な死を次のように知らせる。

“Mr. Behrman died of pneumonia to-day in the hospital. He was ill only two days. The janitor found him on the morning of the first day in his room downstairs helpless with pain. His shoes and clothing were wet through and icy cold. They could'nt imagine where he had been on such a dreadful night. And then they found a lantern, still lighted, and a ladder that had been dragged from its place, and some scattered brushes, and a palette with green and yellow colors mixed on it, and —look out the window, dear, at the last ivy leaf on the wall. Didn't you wonder why it never fluttered or moved when the wind blew? Ah, darling, it's Behrman's masterpiece—he painted it there the night that the last leaf fell.” (*The Complete Writings of O.Henry*, Vol.Ⅲ,194)

“The Last Leaf”は副題“pathetic story”の示す通り「悲しい物語」であるが、O・ヘンリー作品のペイソスには様々なニュアンスがあり、必ずしも全てがペイソスにつつまれたというわけではない。他の作品でも“The Cop and the Anthem”や“The Trimmed Lamp”などの結末には、悲劇ではなくとも一抹の哀愁が感じられる。西部の土地管理局における体験が活かされた作品“Witches' Loaves”は、1904年3月*The Argosy*誌に掲載されたが、これはユーモアとペイソスのコラボレーションとも言うべきO・ヘンリー色の豊かな作品である。詳細な引用は避けるが、これは小さなパン屋を営む女主人と彼女の店でいつも古いパン二個を買う中年の男性の話である。次第に相手に好意を持つようになったこの女主人は、この男が貧しい画家で新しいパンを買う余裕がないと早合点して、あるとき密かに古パンに深い切り込みをつけて、その間にたっぷりバターを押し込んで渡す。しかし実際には男は建築の製図家で、鉛筆の下書きを綺麗に消すための最適の手段として、

わざわざ古くなったパンを使っていたのだった。懸賞に応募するつもりだった新しい市役所の設計図を、バターで台無しにされた男は激怒し、折角の好意が仇となって女主人の片思いは幕を閉じるのである。このように“O. Henry's surprise-ending”と呼ばれる結末の意外性ととも、適度なコラボレーションを施したユーモラスなペイソスもまた、O・ヘンリー文学の看過できない特性と言える。

さて一般的に見れば、著作が出版市場で購読される部数と読者層の充実は作者に対する評価の指標とされるものである。O・ヘンリーの場合のように、一世紀の期間に亘って世界各地の読者に親しまれ続けてきた書物の作者は、その一事からも文学史上に不朽の地歩を印したと言っても過言ではない。一方、多少ともこれに代わる指標になると考えられるものは、文学者あるいはその文学作品に関する研究書の多寡である。たとえば、最近発刊されたPeggy Caravantesによる*O. Henry: William S. Porter: Texas Cowboy Writer* (2004)は、新たに発掘された資料を丁寧に渉猟してテキサス・オースティンでの文学活動を再構築した重量感漲る研究成果として注目されている。このように、日本のアメリカ文学批評界は別にして、本国アメリカにおけるO・ヘンリーに関しての論文やエッセイなどは、かなりの数量のものが、とりわけ1960年代以降今日に至るまで発表されている。これらは評伝的な著作の他にも各種のデータに基づく作品の比較、分析、評価など多彩な内容で、O・ヘンリーの生涯や作品が依然として文学研究者や一般読者の深い興味の対象となっていることはまぎれもない事実である。また、たとえばO・ヘンリーをユーモアやペイソスを混合した独特の味わいを持つ思念の深さを備えた作家であると称揚する擁護論が、実に多いという現況に注目したい。さらに読者を魅了する特異な文学的な潜在性の再検証という点では、従来の伝統的な文学理論が構築してきた研究成果を慎重に踏まえつつも、O・ヘンリーを単なる流行作家という狭義の文学範疇から脱皮させ、あえて新歴史批評の俎上に載せることで一義的意味を逸脱した有意義な論考が生まれるものと期待したい。

注1. 本論の作品からの引用に際しては*The Complete Writings of O. Henry, Vol. III, X, New York: Doubleday, Page and Com., 1917.*に拠った。

## 参考文献

- Current-Garcia, Eugene, *O. Henry: A Study of the Short Fiction*, New York :Twayne Publishers, 1993.
- Horowitz, Paul J. ed., *Collected Stories of O. Henry*, New York: Avenel Books, 1986.
- O'Connor, Richard, *O. Henry: The Legendary Life of William S. Porter*, New York: Doubleday & Company, Inc., 1970.
- Smith, Charles Alphonso, *O. Henry: Biography*, New York: Doubleday, Page and Co., 1916.
- Spiller, R. E. et al., *Literary History of the United States*, New York, 1953.
- Stuart, David, *O. Henry: A Biography of William Sydney Porter*, Michigan :Scarborough House Publishers, 1990.